

留萌最初の馬

留萌に馬が移入されたのは文化年間のことと考えられる。文化二年(一八〇五)に江戸幕府の命令を受けた目附遠山金四郎景普と勘定吟味役村垣左太夫等が蝦夷地を視察し、翌三年にその報告書を幕府に提出した。この視察に際しては徒歩による巡視と

言うこともあって陸上の交通、とくに難所には悩まされたいらしい。
元来、蝦夷地では松前地を除いては馬の飼育は行われていなかった。

しかし、寛政蝦夷の乱の時(一七八九)に松前藩士が馬二十頭を伴って乱の平定に出陣したといわれ、その後寛政十一年(一七九九)に東蝦夷地山道を開いた時に類似以東の東蝦夷地の各会所に駅馬を飼育させ、人や荷物の輸送にあたらせた。

福 士 広 志

海のふるさと館学芸係長

ところが西蝦夷地ではまだ山道が開かれていなかった。文化初年に文化初年(一八〇七)になって東蝦夷地から西蝦夷地への山

に留萌を訪れた松浦武四郎は「十三日出立。此処馬六匹有故、重役徒士の衆皆陸道荷物凶合船にて輸送せし処、トマイよりまた迎馬参りし故、僕も馬にて行」と書き残しており、公用の時は馬が総動員されたこと



乗馬をするアイヌの人たち

道が開かれ斜里、宗谷、苦前、留萌の各場所に馬が配置されたのである。

これはほとんどが運搬用として使用され、各場所の運上屋が委託管理にあたった。留萌では元町にあった栖原の運上屋が飼育管理した。弘化二年(一八四五)

がわかる。また、同じく武四郎の安政三年(一八五六)の西蝦夷地誌には「其の辺多く馬を放ちたり云々」馬有り、是継立る馬を用ゆ云々」とあり、約五十年のうちに蝦夷地での馬の普及は目を見張るものがあつた。安政元年の留萌以北の飼育

必要な折に貸し出すこととした。しかし、漁民、農民が増加するにつれ馬の需用はますます増していき、文久三年(一八六三)には請負人はもとより出稼ぎの者にも自由に所有飼育することができるようになった。